

組織目標評価報告書（令和7年度）

部局名：		学域名：	部局長名：
資源植物科学研究所		—	馬 建鋒
目 標		目標に対する達成状況(成果)及び新たに生じた課題等	
①教育領域		教育領域における目標の達成状況及び新たに生じた課題等	
1. 英語による授業や留学生との交流を通じて国際感覚を持つ大学院生を育成する。 2. 植物科学の基礎科学から応用まで幅広い教養を身に付ける教育を実施する。 3. 学生や若手研究者を中心とした国際フォーラム、研究所の研究について互いに議論するアッセンブリー、国内外の突出した研究をおこなっている研究者を招く植物科学シンポジウムの開催を通じて、大学院生のコミュニケーション能力を高める教育を実施する。 4. 指導教員との緊密なディスカッションなどを通じて、研究力、分析力、行動力を持つ大学院生を育成する。	関連する 中期計画の番号 (5-1)	1. 英語による授業や留学生との交流を通じて国際感覚を持つ大学院生を育成した。 2. 植物科学の基礎科学から応用まで幅広い教養を身に付ける教育を実施した。 3. 国内外の若手研究者を対象に国際トレーニングコースを開催した。国内外から6名を当研究所に招き、技術を学び、また、大学院生等、所内若手研究者との交流を深めた。 研究所に在籍する所員、大学院生が所の研究の最近のトピックについて紹介し議論するアッセンブリーを実施し、所内における情報交換を推進した。さらに、内外の最先端の研究を実施している研究者を招いての第41回資源植物科学シンポジウムおよび第17回植物ストレス科学シンポジウムを3月に開催し、その質の高さにおいて好評を得た。 4. 指導教員との緊密なディスカッションなどを通じて、研究力、分析力、行動力を持つ大学院生を育成した。	
②研究領域		研究領域における目標の達成状況及び新たに生じた課題等	
1. 高等先鋭研究院の一機関として、ありたい未来の実現に寄与する環境頑健作物、高付加価値作物、環境限界を突破する作物の作出を目指し、その基盤となる植物の様々な生命活動に関する基礎科学的研究、遺伝資源の活用に向けた研究、獲得された知見や資源を社会実装するための開発研究を実施する。 2. 大学改革推進を目的とした国際研究拠点形成プログラムの継続実施、J-peaks事業の推進、研究所横断的先端研究の推進などを行う。 ・国際共著率:55%以上 3. 全国共同研究共同利用拠点として引き続き国内外の共同研究を推進する。また、基礎研究を中心としている研究所においても、「共同・受託研究費及び受託事業受入額」の目標値の達成に向け、国内外の企業も含め相手方機関の開拓を進める。 4. 植物研究拠点アライアンスの連携強化を進める。 5. 科研費申請に係る個別面談や本研究所独自添削の継続実施により科研費取得率の向上・維持、さらに論文の質と数の向上を目指す。論文数は60報以上を、既に目標値を達成しているQ1ジャーナル掲載数はさらなる飛躍を目指す。	関連する 中期計画の番号 (8-1) (9-2)	1. 惑星物質研究所が主催し、高等先鋭研究院の2研究所(資源植物科学研究所・異分野基礎科学研究所)と連携して企画した国際シンポジウム 2026 MISASA IXに参加し、産学官での有意義な交流を通じて、火星科学研究の体制強化に寄与することが期待される。 また、文明動態学研究所と共に高等先鋭研究院連携プロジェクト「作物遺伝資源×考古学で拓く農と食の共創進化石」研究ネットワーク構築ワークショップを開催し、考古学と遺伝学・ゲノム科学を融合させ、作物の移動が食文化形成にどのように影響したのかを明らかにするための研究体制の整備に取り組んだ。 2. 大学改革推進を目的とした国際研究拠点形成プログラムについて、RECTORプログラム「光合成国際研究拠点形成プロジェクト」[生命科学]を推進した。ミュンスター大学(ドイツ)から教授1名をクロス・アポイントメント制度により招聘し、修士課程学生を研究員として受入れ、光合成装置の構造学的国際研究を進め、横断的先端研究を推進した。 ・国際共著率は、52.32%でほぼ目標を達成することができた。また岡山大学全体44名のうち、研究所からは名の教員が世界で最も影響力のある研究者トップ2%(2024年版)にランク入りし、研究所の質の高さを示している。 3. 全国共同研究共同利用拠点として国内共同研究は52課題、国際共同研究は3課題を実施した。また、一般企業との共同研究については、受入件数15件を数え、受入目標金額 300万円以上を大幅に上回る710万円を受け入れ、目標を達成した。 4. 植物研究拠点アライアンスが中心となり申請していた、文部科学省の「学際領域展開ハブ形成プログラム-地球レジリエンス強化に向けた低温プラズマ学と遺伝学のフロンティア学際ハブ-」事業」に本年度採択された。 5. 教員34名のうち、採択された科研費の件数は29件にのぼり、大型研究費(学術変革(A)計画研究)も採択された。総額は2億以上で、昨年度より増加した。 ・発表論文数については、86報で、目標を上回った。 ・Q1ジャーナルへの掲載数は、58報で、目標を達成した。またTop10%論文が19報で、いずれも昨年より大幅に増加した。	
③社会貢献(診療を含む)領域		社会貢献(診療を含む)領域における目標の達成状況及び新たに生じた課題等	
1. 地域社会との連携を強化し社会貢献を促進するため、アウトリーチ活動を実施する。 ・幼稚園児を対象とするレンゲ摘み ・中学生の職場体験、高校生を対象とするサマースクール ・大学生の実験体験プログラム ・一般市民を対象とした公開講座や研究所一般公開 2. 地元産業界との交流を推進し、研究所が保有する研究資源の共同研究による積極的活用を通じた社会貢献を目指す。	関連する 中期計画の番号 (1-1) (8-1)	1. 以下のアウトリーチ活動を積極的に実施し、地域社会との連携を強化し、社会貢献を促進した。 ・近隣の幼稚園児対象のレンゲ摘みを4月に実施し、24の幼稚園、651名の園児を集めた。 ・近隣の中学生の職場体験(チャレンジワーク14)を11月に実施し、2校、3名の参加者があり好評を得た。また、近隣の高校生対象の見学会を7月と12月に開催し、2校、37名の参加者から好評を得た。 ・近隣の高校生33名が全9コースに分かれ、植物科学に関する実験を行うサマースクールを実施し、好評を得た。 ・全国の大学生・高専生を対象に、2泊3日のインターンシップを2月に開催し、大学院レベルの研究体験の機会を提供した。併せて(株)クラボウの協力を得て、近代倉敷を形成する基礎となった大原孫三郎氏の先見性に満ちた業績などを紹介し、将来の職業・進路の選択の一助として寄与した。 ・一般市民を対象とした研究所公開を、5月に実施し、過去最多の参加者520名を集めた。また倉敷市との連携による公開講座(倉敷市大学連携講座)について、当研究所にて教員2名を講師として10月に実施し、45名の参加者から好評を得た。 2. 大原孫三郎が創設した研究所等(大原記念倉敷中央病院(大原記念倉敷中央医療機構)、大原美術館(大原芸術財団)、資源植物科学研究所、大原社会問題研究所、大原記念労働科学研究所、)で構成する「大原孫三郎関連施設・機関ネットワーク」(大原ネットワーク)の連携を深め課題解決を図る取組みに参画し、検討を進めている。	
④管理運営領域		管理運営領域における目標の達成状況及び新たに生じた課題等	
1. 教員の世代交代に若手教員の増加や女性教員の増加と、将来を見据えた研究の方向性を考慮しての研究組織の再構築を進める。特に補充人事において上位ポストの女性教員を積極的に採用する。 2. 研究所員の意見を聞き、各種委員会を整理し、研究に専念できる方策を策定する。 3. 職員と緊密に連携して、仕事の効率化を推進する。 4. RI施設の閉鎖、老朽化または低耐震建造物の更新の必要性を考慮し、設備・機能の再編・集約を図るためのキャンパス構想を策定する。	関連する 中期計画の番号 (11-2) (12-1)	1. 教授1名及び准教授1名の退職に対し優秀な教授1名、若手(20代)のテニュアトラック助教1名を採用することができた。女性教員について1名の優秀なWTT助教を戦略的スカウトにより採用し、将来上位ポストを視野に入れた女性教員の補充に繋がる布石を打つことができた。 2. 教員3名の退職に伴う所内・全学の各種委員体制について、適材適所に整理・配置した上で、メールにて所員の意見を聞き、各教員が研究に専念できる体制を決定した。 3. 仕事の効率化を推進するために、隔週開催の所長室会議や隔月開催の教員会議、不定期開催の所長室セミナー等を通じて、教員、技術系職員、事務系職員と緊密に連携している。8月の所長セミナーでは、研究・イノベーション共創機構と連携し、URAを講師に迎え、教職員向けの生成AI研修を実施し、参加者に研究や業務でのAI導入について学ぶ機会を設けた。 4. RI廃棄物の日本アイソトープ協会への引き渡ししが10月に完了し、12月にRI施設の廃止措置が完了した。また、複数の老朽化した建築物の機能再編・集約を図るためのキャンパス構想の策定に向け、施設企画部と協議を進めており、協議にあたっては大原奨農会及び倉敷市に整備計画への協力を打診した。	

注1) 本様式全体が1ページに収まるよう作成してください。
注2) 自己評価による達成度(5～1)は非公表項目とし、組織目標評価結果を公表する際に消去します。